

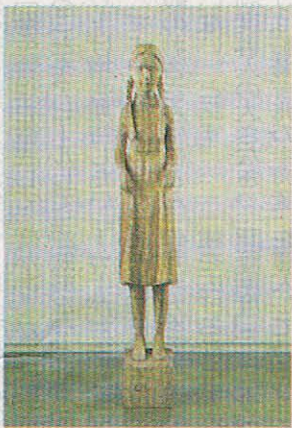
展覧会

■ 大竹利絵子展

彫刻とはかくも難しいものかとあらためて考えた。素材や技術が多様化する中、その造形や物量に見合うだけのコンセプトがなければ、ただのキッチュな置物になってしまう。自立した物としての存在感を獲得すること。そのための深い逡巡が、大竹利絵子の作品には刻み込まれている。

大竹は2007年東京芸術大学大学院博士課程を修了。昨年の東京での個展に引き続き、現在は京都市下京区の小山登美夫ギャラリー京都で新作の木彫10点による個展を開催している(26日まで)。

主要なモチーフである少女の繊細な佇まいとは裏腹に、その表面には鑿の跡が荒々しく残されている。木彫において造形とは彫ることであり、その行為によってのみ作品は



大竹利絵子「あこがれ」

荒々しくも繊細な木彫

生み出されるといふことを示しているかのようだ。

対で置かれた「Girl」「Doll」という2点の作品は、一見どちらが少女で人形なのか判然としない。これらはいずれも、近代彫刻が理想としてきた人体のプロポーションにとらわれない大竹独自の世界観を体現している。また展示台に座り両足をぶらりと下げた「夢みたいな」、膝に小さな少女を乗せた「Magic」など、これまでの木彫には見られない自由で幻想的な作風が印象的だ。

「あこがれ」は、他とは異なり、足下に台座を残した作品になっている。顔や手の表情は気品に満ち、ゆるやかに持たせた背筋は仏教彫刻のそれを思わせる。近代以前の彫刻の流れを汲みながら、そのあり方を現代に反映させようとする強い意思。そして、時間をかけて眺めるほどにその細部に吸い込まれていくような魅力がこの作品にはある。展示構成や照明も洗練されており、木彫ならではの静謐な空気が広がっている。

(西宮市大谷記念美術館

学芸員 池上 司)